

◆江戸幕府推奨の商品作物の不振◆

古文書にみる宿場と村の生活

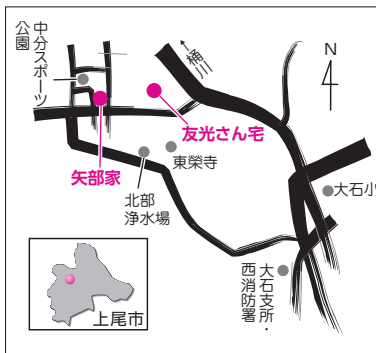
甘藷先生と称された青木昆陽が『蕃藷(薯)考』を刊行する以前に、幕府は農民に甘藷の栽培を奨励している。足立郡大門宿(さいたま市)には、享保七(一七二二)年の甘藷試作の代官への報告記録が遺されている。甘藷二〇箇を植え、二箇が発芽して蔓が一尺ほど伸びたが、他は腐食したという報告である。享保十五(一七三〇)年の高麗郡小瀬戸・小岩井村(飯能市)では代官の勧めで甘藷を作付けしたが、枝葉ばかり伸びて根に「実」ができなかったとの報告がある。二つの試作例の栽培法は、直接種芋を畑に植え、発芽した蔓を切り取って畑に挿している。蔓を畑に植えるのは陽暦の八月ごろになり、根に甘藷が実らないうちに冬の到来となる。九州などの暖地なら格別だが、寒い関東では収穫はできないということになる。『蕃藷考』の栽培法も同様なので、昆陽の仕法では関東の寒地では収穫できないことになる(『上尾市史調査概報3』)。

ところで上尾市域の中分村矢部善兵衛家では、天保六(一八三五)年から甘藷を二



苗床で発芽したサツマイモ(市内農家の友光さん宅)

三反歩と大量に作付けしている。ここでの生産は、甘藷苗を「苗床」で発芽させ、陽暦の五月下旬には苗を畑に植えている。この時期に苗を植えば、秋には根に十分甘藷を実らせることができたことになる。「苗床」で早期に発芽させる仕法は、農民の知恵で発明されたもので、昆陽の著書にはない栽培法である。この事例では、幕府の不見識が農民を困らせ失敗した施策であったことになる(前掲書)。



江戸時代前期の菜種生産は西国が中心で、江戸の灯火原料の菜種油は大坂から移入している。ところが災害時に輸送が途絶えると、菜種油は値上がりして江戸町民を困窮させることになる。そこで幕府は、享保十四(一七二九)年に関東での菜種栽培奨励策を打ち出す。翌享保十五年には、武蔵国足立郡でも栽培推進の世話役が任命される。足立郡上尾以北の村々では、南村名主須田治兵衛が世話役になっている。治兵衛は、幕府の指示に従い種を配り栽培を促したと見え、各村々から栽培の結果報告が寄せられている。ところがこの報告書では、ほとんどの村が菜種は冬の寒さに枯死し、収穫は皆無であると記している。この状況は翌年も同様で、関東では栽培は無理であると村々は訴えている。この報告をみると、幕府が農民の利益も考えず強行したことが失敗の原因で、農民たちも幕府の指示に必ずしも従わなかったことがうかがわれる(『上尾市史第六巻通史編(上)』)。

※「古文書にみる宿場と村の生活」は今号で終了です。次号からは新シリーズを連載します。お楽しみに…。



アップーを探そう!

勉強中のアップー(右のイラスト)が登場するのは? ページ



【賞品】 正解者の中から抽選で5人に、粗品を差し上げます。

【応募方法】 はがきかメールにクイズの答え、住所、氏名、年齢、電話番号、『広報あげお』の感想を記入して、3月21日(木)まで(必着)に上尾市広報課「わくわくクイズ係」へ。

あて先: 〒362-8501本町3-1-1
メールアドレス: s55000@city.ageo.lg.jp
【発表】 賞品の発送をもって発表に代えさせていただきます。 ※正解は4月号のこのコーナーで。前号の答えは「9」でした。ご応募ありがとうございました(応募者48人)。

市の人口・世帯

(平成25年2月1日現在)

22万7,540人

男/11万3,468人

女/11万4,072人

※前月より15人増。

9万4,219世帯

◆「広報あげお」は、各支所・出張所、JR上尾駅・北上尾駅の他、市内の各公共施設、金融機関などに置いてあり、自由に持ち帰れます。
◆環境保全のため、市内の公共施設へのお出掛けは市内循環バス「ぐるっとくん」を利用してください。